

る。此れは畫に就いて例を取ると能く明かになるのである、論理的方法に従うと、畫は直線から始めなければならぬ、直線が最も簡單で、總べての基礎となつて居るのである。一直線を引いたならば、次に反對の所に又一本の直線を引き終りに其れを結び付けるのが其の順序であります。然し心理的方法、即ち自然的方法に依ると決してさうではない、子供が始めて畫を書く時に直線を引くでせうか、決して直線は引きません。曲りくねつたものを引きます、若し直線が出来れば其れは全く偶然で、然も其れが彼れの意志に反いたものであります、幼兒は斯る直線とも曲線とも就かないものを引いて、彼れの周圍にある實物を寫さうとするのである。普通は人を描くもので、一個の圓に二本の線を引いて、其れで以て人が書けた積りで喜んで居るのであります。此れを以て觀てもフレーベルの論理的方法に依つて組織構成せられた恩物が、幼兒の精神中に實際働らいて居る方法と大に異つて居るとが分るのであります。

## 子供の友一茶

倉橋生

「親のない子は何處でも知れる

爪を唾へて門に立つ」

三才にして母に逝かれて、一茶はその時から悲哀の人となつた。信濃の國芙蓉湖のほとり、柏原村の夕暮は、さなきだに山國の秋が冷い。その秋風の冷い門に、爪を唾へては獨り淋しく立つ、幼い一茶の姿が目に見えて来る。一茶の幼名を彌太郎といふ。彼の有名な

我と來て遊べや親のない雀

の句は、孤兒彌太郎が六才の折の切ない聲である一茶は後に、その頃のつらい思ひを追懷して書いて居る。

親のない子は何處でも知れる、爪を唾へて門に立つと子供等に唄はるゝも心細く、大かたの人

交りもせず、うらの帛に、木萱など積みたる片  
陰に踞りて、長の日を暮しぬ。我身ながら哀れ  
なりけり。

柔いおさな心は、生みの母親の慈愛によつてこ  
そ真にはぐくまれる。そのはぐくみの懷を奪はれ  
た孤兒の心の陰影は、生涯を通じて、消え難いも  
のである。況して多感なる詩人の胸奥には、いつ  
まで経ても此の淋しみが忘れられなかつた。それ  
が折に觸れ物につけては句になつて出て居る。

鶯も親子つとめや梅の花

門かすぞ啼かすに遊べ雀の子

源氏三つのおし我も三つ

とし母に棄てられたれど

孤の我は光らぬ螢かな

二

生母の懷を奪はれた孤兒は、たゞに受くべき愛  
を受けなかつたばかりではなかつた。世にも苛酷  
なる繼母の手に育てられて、幻い子供にあり得る

限りの不幸を受けた。

「一年三百五十九日、目の腫れざることなかり  
けり」

とは、順境の家庭に育つた幸福兒の到底察しもつ  
かぬ悲惨である。宜なるかな自ら此の悲惨の味を  
沁々と味つて居る詩人の同情は、世の不幸なるま  
ゝ子の上に、とめどない熱い思ひやりの涙となつ  
て溢れて居る。

まゝつ子や納涼仕事に藁たゝく

まゝつ子や晝寝仕事に蚤拾ふ、

まゝつ子が一つ團扇の修獲かな、

若竹の子さへのがれぬ憂世かな、

また無駄に口あく鳥の子供かな。

○

昔大和國主田村に、むくつけき女ありて、まゝ  
子の咽を十日程はしてより、飯を一椀見せびら  
かしていふやう、是をあの否地蔵のたべたらん  
には、汝にもとらせんとあるに、まゝ子ひだる

さに堪へがたく、石佛の袖にすがりて、しかしかねがひけるに、不思議やな、石佛大口開いてむしやく喰ひ給ふに、さすがのまゝ母の角もほつきり折れて、それより、我生める子とへだてなく、はごくみけりとなん。その地藏ぼさつ、今にありて、折々の供物絶えざりけり。

ぼた餅や藪の佛も春の風

高井郡六川郷六かはの里、山の神の森にて、栗三つ拾ひ來りて、庭の小隅に埋み置たりしに、つやくと芽を出して嬉しげなりけるを、東隣にも、家にかをつくり足しぬるからに、月日の恵みと、かす、雨露の潤ひうとければ、其の歳やをら一尺ばかり伸びげり。しかるに此の國のならひ、冬になれば、東より西より南より北より、家の大雪をひた落しに蓄しこむからに、恰も越の白山一夜に兀と漏出たるに等しく……や、卯月八日髪さけ虫の歌を廁に張る

頃、山鶯の折知り顔になれば、雪の消え口より見るに、哀なるかな、栗の木は根際よりほきと折れて仕舞ひぬ。人ならば直に無常の烟と立昇るべきを、古根よりそろ／＼青芽吹いて、辛うじて一尺ばかり伸びけるを、又前の如く、家の雪を落しこまれて、ほきりと折れ、年々折れ／＼て、ことし七年の星霜を累ぬれど、花咲き實入る力もなく、されど此の世の縁つきざれば枯れも果てずして、生涯一尺許りにて、生きて居るといふ許りなるべし。我又さの通り梅の魁に生れながら、茨の遅生に地をせばめられつゝ、鬼は、山の山おろしに、吹折られ／＼して晴々しき世界に芽を出すは、一日もなく、ことし五十七年露の玉の緒の今まで切れざるも不思議なり。しかるにおのれが不運を、科なき草木に及ぼすことの不便なりけり。

撫子をまゝは、木々の日陰草

三

父としての一茶には三人の子供があつた。三人の愛子の父として、一茶は随分子煩惱の詩人であつた。

こぞの五月生れたる子に一人

前の膳を据ゑて

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

片乳を握りながらに初笑ひ

蓬萊に南無々々といふ子供かな

小坊主が棒を引ても吉書かな

わんぱくが先づ手のひらに筆初め

今一つ雛の目をせよよい娘

末の子も別にねだりて蠶かな

三尺に足らぬ幟のお客かな

とつとときに金太郎するや幟客

書團扇をくしやくにする童かな

子寶がきやら／＼笑ふ樞火かな

其あとは子供の聲や鬼やらひ

我家の子供も鬼を追ひにけり

妹が子は餅負ふ程になりけり  
幼子や只三つでも年をとる

四

幼にして不幸の子であつた一茶は、長じて亦不幸の父であつた。愛妻の死はその不幸の第一であつた。亡妻に對して

小言いふ相手もあらばけふの月

の敦厚なる衷情を吐露して居る一茶は、殊にその遺子に對して、

おさな子や笑ふにつけて秋の暮

かたみ子や母が來るとて手をたたく

なる、切實の哀憫を感じて居る。自ら孤兒の淋し

さを味ふて居る身の、我愛子も亦同じ様なる孤兒

になつたと思ふ一茶の心情は察するに餘りあるの

である。

第二の不幸は、心卑しき後妻が、此の大詩人の偉大を解し能はずして、すげなくも去つて行つたことである。流石の一茶も此の無情なる下劣なる愚

女に對しては、冷然たる態度に出づるの他なかつたが、哀れなるは遺された子供達である。子煩惱ではあつても、自らは子供の世話の行届かない詩人の父は、是非なく幼兒を他人の養育に托した。然るに何の不幸ぞ、その子は所謂預り子の不幸を身に負ふて、瘦せ衰へてついに死んだ。

なごしこや地蔵菩薩のあとさきに  
不幸なる父は斷腸の人となつた。その子煩惱詩は哀調を帯びざるを得ないのである。

陽炎や目につきまよふ笑ひ顔

みどり子が二七日の折の句である。我子が死んだとは思へないといふ、不幸な親の實情であらう。

子ありとや蓬の門の蓬餅

愛子を失ふた親が、子供のあるよその家庭を眺めた時の、何とも形容のしようのないやる瀬ない思ひは、斯うでもあらはすより他なからう。

行く雁や子と覺しきを先に立て

大勢の子を連れありく雀かな

鶺鴒も親子鶺鴒も親子二人かな  
名月や膳へ這寄る子があらば  
水いらぬ親子暮しや山の鹿  
棹鹿も親子三人暮しかな  
燕の子親子揃ふて歸りけり

五

子として母に疾くわかれ、父として子に先だれ親子の愛情を胸にのみ湛えて過ぎなければならなかつた詩人に、親子の愛情に對する切實なる詩の多いのは自然であらう。一茶句集を誦するもの、胸に響いて忘れられぬ名句の多くは、此の眞情の誦詠である。

雀子にもものやる親も口を開く  
寝せつけて子の洗濯や夏の月  
母馬が番して飲ます清木かな  
涼風のなく木へ縛る我子かな  
母親や納涼がてらの針仕事  
逃るなり紙魚が中にも親と子よ

放れ鶴が子のなく舟に戻りけり  
 子持鶴が大聲あげて戻りけり  
 人聲に子を引かくす女鹿かな  
 蚤のあと敷へながらに添乳かな  
 泣くなとて母が踊るや門の月  
 溢いとこ母が喰ひけり山の柿  
 下冷の子と寝がはりて添乳かな  
 わかぎれをかくして母の夜伽かな  
 山寺や子に迷ふ親の衣配

六

親と子との情愛に限らず、子供に向つて注がれた  
 やさしい一茶の同情を、實に遺憾なく發露して居  
 る句の中、殊に心をひくものが四つある。其一つ  
 は

その齋ありたけ買はん娘の子  
 である。春の夕べの街に、いたいな娘の子が、  
 賣り残した齋の荷を持ちあぐんで、しよんぼりと  
 立つて居る様が見える。そこへ通りかゝりの一茶

翁の、旅に汚れた破れ衣の破れ笠の姿も見える。  
 忙しい——いは自分のことのみ考へて居る街の  
 人達は、誰れとひり此可憐なる齋賣を顧るもの  
 もない。温い春のことゝて、そこらには樂しそ  
 うに戯れ遊んで居る子供達もあつたであらう。あゝ  
 之れも亦人の子かと思ふと、一茶翁のやさしい胸  
 は痛んで來た、その齋ありたけ買はん娘の子。た  
 い十七字最よくその抑へ難い眞情を盡して居る。  
 それから

七歳の順禮ぶしや夕しぐれ

小座頭の追ひつめられし時雨かな

の二句にも、世に憐れな子供達の、はかない哀れ  
 さが沁々と胸にせまる。

朝霜やしかも子供のお花賣

之れは善光寺にこの實景であるらしい。あの大き  
 な善光寺の大伽藍と冴えきつた霜の朝とを背景に  
 して、小さい子供の花賣の姿が、小さく、尙  
 々あはれに見えて來る。彼の有名な、雪の日やあ

れも人の子樽拾ひも、詩人が優情の發露には相違ないが、「あれも人の子」のいさゝか理詰がかつた月並調に折角のしんみりとした感じが殺がれる寧ろ一茶の此四つの句の、卒直にありのまゝの實意から胸の底までそゝりたえられる様な哀音に若くべくもない。げに、小座頭の追ひつめられし時雨かな。その寒さうな小座頭の慄へ姿が目に浮いて来る。七才の順禮ぶしや夕しぐれ。おぼつかない順禮ぶしが、濕ひをもつた時雨の夕のうす暗がりから、かすかにあはれに聞えて来る。

七

一茶の生涯を外から見れば、奇矯と飄逸の極、殆んど狂人に類する如きことさへあつたが、併しその内には尋常人の及びもやらぬ優しさを湛へて居た。規矩尋常の生涯を送るには、寧ろ餘りに情熱に充ち、同感に過ぎたのである。即ちその風懷は一方には世の一切の權貴富貴を嘲笑する不羈の詩となり、一方には、淺薄陳腐なる世態のしかつめ

らしさを嘲つて、滑稽洒脱の詩となると共に、又一方には子供や、動物や、草木や、有情無情の弱者に對する親切切實の同情詩となるの兩極端(外見的)に陥つて居るのである。強者に對して強い詩人は、弱者に對して弱い詩人であつたのである。弱者に對する充分なる同情を有し得る様にその生涯を通じて弱者の苦味を嘗め盡した詩人であつたのである。外のことは暫く措く。少くも彼れが子供を詠せる詩に富み、殊に同情同感の哀調に富める點は、彼れの先天的多感と共に子供としての又子供に就ての不幸多かりし彼の生涯の結果であつたのである。かくて我國の詩人の中で、其量に於て、その質に於て、兒童詩人の恐らく第一者たる一茶は、充分の尊敬と研究とを我等に要求するものである。

吹き来る風に任かせてへだてなき

海の心のひろくもあるかな

(賴三樹)